

FM English Basic レポート

7 期生 D グループ

1.背景

「FM English Basic」は、英語を母語としない大学院生を対象に、アカデミックライティングの基礎を体系的に学ぶことを目的とした短期集中講義である。アカデミックライティングは、単に学術的な文章を書く技術だけではなく、研究者としての思考の整理、論理の構築、そして科学的な信頼性を担保するための重要な手段となっている。本講義では、そのようなスキルを短期間で集中的に習得することが期待できる。

2.目的

論文執筆に必要な構成、論理展開、語彙選択、文法的な正確性など、アカデミックライティングの基礎を段階的に学習する。また、英語でのプレゼンテーションに必要なスキルも学ぶ。それらを通して、科学的な内容を理解しやすい表現で正確にプレゼンする能力の向上を図る。

3.授業内容

本講義は、神田外語大学教授の Kevin Knight 先生を講師として迎え、2025年8月4日から7日の4日間にわたり、星稜キャンパス医学部6号館講堂にて開催された（各日約4時間）。前半の3日間は、テキストに沿って体系的に学習した。初日は講義の導入と「Writing Skills」に関する内容が中心に扱われた。2日目には「Elements of Writing」に焦点が当てられ、3日目は「Writing Models」の紹介と、それまでの内容の総復習が行われた。各回の講義にはペアワークやグループワークが積極的に取り入れられており、参加者同士が協力して教材の課題に取り組んだ。また、講師から提示されたトピックについて意見を交換する場面も多くあった。最終日には、参加者による5分間の英語プレゼンテーションが実施され、それに対する口頭評価が行われた。プレゼンテーションでは、各自が自身の研究テーマ、または関連する重要な論文について、専門外の聴衆にもわかりやすい表現で説明することが求められた。評価では、発表内容に対する肯定的なコメントに加え、改善点に関する建設的な意見を述べた。

使用テキスト：Bailey, S. (2025). *Academic writing : A handbook for international students* (sixth edition). London: Routledge.

4.結果

本講義を通じて、アカデミックライティングの基礎的知識を体系的かつ段階的に習得することができた。講義では、教科書の内容に関する講師による丁寧な解説に加え、グループワークやペアワークが豊富に取り入れられており、参加者同士の対話を通じて理解を深める機会が多く設けられていた。これにより、ライティングスキルのみならず、英語による口頭表現能力の向上にも繋がった。使用教材は300ページを超える分量であり、短期間で全体を網羅的に理解することは容易ではなかった。しかし、講義では特に重要な項目に焦点を当てて解説が行われたため、実践的な学びにつながった。講義の最終日に実施されたプレゼンテーションでは、専門分野の研究内容を他分野の聴衆にも分かりやすく伝えることが求められ、自身の研究目的や意義を再確認する良い契機となった。プレゼンテーションの構成を考える過程では、ペアワークを通じて聞き手の視点を取り入れることができ、内容の明確化と説得力の向上に役立った。さらに、発表後には参加者からの口頭による評価が行われ、第三者の視点から自身の発表を客観的に振り返る機会が得

られた。これにより、今後の改善点を具体的に認識することができた。全体を通して、本講義は英語による学術的な表現力を高めるための実践的かつ効果的な内容で構成されており、短期間ながら非常に充実した学習体験となった。

5.研究や仕事などに活かせる点

本講義で得られた学びは、研究活動や今後の仕事において多方面で活用できる。まず、論文執筆に必要な基本構成や論理展開の整理方法を体系的に学んだことにより、自身の研究成果を明確かつ説得力のある形で発信する力が向上した。特に、重要な概念を専門外の読者にも伝わる表現へと翻訳する練習は、学際的な共同研究や国際学会での発表に直結する。さらに、ペアワークやグループワークを通じて「聞き手の視点」を常に意識する姿勢が養われ、単なる情報提示ではなく、相手に理解してもらうための工夫が身についた。これは研究指導や仕事の場においても極めて有用である。また、短期間で大量の教材に取り組む中で、重要な部分を抽出して効率的に学ぶ力も強化された。研究活動では膨大な文献を取捨選択する必要があるため、このスキルは今後の文献調査や研究計画の立案に大きく寄与する。最終日のプレゼンテーション演習では、自身の選択した文献の研究目的や意義を再確認すると同時に、第三者からの建設的なフィードバックを得られた点が重要である。これは、研究成果を社会に発信する際に不可欠な「自己評価と改善」のプロセスを実践的に学んだことを意味する。総じて、本講義で培ったライティング力とプレゼン力は、研究者としての国際的な発信力を高めるとともに、将来のキャリアにおける基盤となる。

6.改善点

今回の講義では多くの実践的な学びを得られた一方で、いくつかの改善点や限界も存在した。まず、活動の中心がペアワークであったため、実際の論文執筆に近い分量や構成を一人で書き上げる経験までは十分に積むことができなかった。時間的な制約もあり、本格的なライティングの演習は限定的であったといえる。また、扱った教材は膨大な教科書の一部に限られていたため、全体像を俯瞰するというよりは、特定の章やテーマに絞った学びに留まった。この点に関しては、今後より幅広い文献を対象とした演習や長期間の演習、個々のライティング演習を通して補う必要があると考えられる。

7.結語

本講義は、限られた時間の中でアカデミックライティングの基礎を体系的に学ぶ貴重な機会であった。ペアワーク中心の実践や教材範囲の限定といった制約はあったものの、研究成果を明確に発信する力や聞き手を意識した表現力を養うことができた点は大きな収穫である。今後は講義で得た基盤を土台に、より実践的な論文執筆や幅広い文献への応用を通じて、研究者としての表現力と国際的な発信力をさらに高めていきたい。